

◎今週の御言葉 「十字架の道を歩まれたキリスト」(ゼカリヤ書9章9～10節、マルコの福音書11章1～11節)

「シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜り、柔和で、ろばに乗られる。それども、雌ろばの子の子ろばに。」(9:9) 「そして、前を行く者ども、あとに従う者も、叫んでいた。『ホサナ。祝福あれ。主らの御名によって来られる方に。祝福あれ。いま来た、われらの父ダビデの国に。ホサナ。いと高き所に。』」(11:9, 10)。

◎イエス・キリスト様が何故、苦難が待っている十字架の道をまっしぐらに先頭に立って、しかも「ロバの子」に乗ってエルサレムに入城されたのでしょうか？

◎ゼカリヤ書9章には、神殿は完成したが、民の生活が目立って楽になったわけでも、ダビデ王朝が復興したわけでもなかった。人々は疲れを覚え、神の民としての誇りを失い、信仰の危機に陥る。そうならないために希望が必要だったのです。9-10節はメシヤ預言です。11節以降はメシヤによって回復し、祝福される神様の民の描写なのです。メシアなる御方は武力ではなく、謙遜と愛で人々に仕える平和の君であり(9-10, マタイ21:4-7)、争いと恐れに満ちた世界でもその平和は人々の心に広がり続けるのです(ルカ17:20-21)。

◎当時のエルサレムは過越の祭りのため群衆でひしめき合っていたのです。以前に自らの苦難と死について三回にわたって予告しておられたイエス様はその一行と共にエルサレムに入城されたのです。その際イエス様は、メシア的王として歓呼の声で迎えられたのですが、実際は王にふさわしく馬に乗って威風堂々としてではなく、ろばに乗っての入城でした。ろばは物や人を運ぶための動物で、戦うためのものではなく、平和のシンボルなのです。これははっきりと「**受難のメシア**」としての自らの使命を明らかに示すためなのです(イザヤ62:11、ゼカリヤ9:9)。

◎イエス様は確かに〈王〉ではありますが、自らが武力によって支配する王ではなく、人々の嘲笑を受けながら、自己をささげるといって徹底的無抵抗の王であることを明らかに示されたのです。正にイエス様は「**平和の君**」として来られたのです(イザヤ9:6)。ですから平和の象徴として「ろばの子」しかも「人間が誰も乗ったことのない、ろばの子」と指定され、それに乗られたのです。これは特に神の御用のために聖別されていた印です(民数記19:2、申命記21:3、サムエル①6:7)。〈ホサナ〉とは「今、お救い下さい」の意味です。私たちも心に開いて主をお迎えしましょう。群衆は主イエス様を偉大な預言者、王として迎えました。自分たちの期待はずれの現実に失望したのです。私たちには、主イエス様を「主」としてお迎えし、従う事が求められているのです。